僕の妄想と夢魔

荒野　京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の妄想と夢魔

【Ｎコード】
Ｎ６３１３Ｙ

【作者名】
荒野　京介

【あらすじ】
夢魔が嫌な少年に食いついて妄想を叶える話。
可哀想な（主に少年が）物語である。

プロローグ（前書き）

初投稿です。　高1のバカです。　長く続けられておもしろい話になったらいいなぁ。　てか俺がする！

プロローグ

プロローグ

この世界には夢魔と言う悪魔がいる。いわゆるサキュバスだ。夢魔は人の妄想を叶えてその者の幸福を餌として生きている。叶えた妄想の大きさが大きいほど叶えた夢魔の寿命は延びる。
そして長い年月を生きていくのだ。
夢魔にあった者は幸せになれるしかしその者の妄想を叶えない限り夢魔は元の世界に帰れないし寿命も縮まる。
このようなルールがたくさんあるらしいのだが今はめんどくさいので他のややこしいルールは省いておこう
いやっ教えるのがめんどくさいって事はない。断じてないんだ。うん、
まぁ軽く言っておくと妄想通りにしないと即死とか←もっとややこしいルールです。　などなど。。
てか・・もぅ実際ルール聞いた時僕が理解できなかっただけなんだけどね・・・
まぁそれは置いて・・・
この物語は最悪な少年＝僕こと中村弓弦（なかむらゆづる）に食いついてしまった可哀想な夢魔の物語である。
さてと、僕が夢魔を呼び出した最初の妄想の話をしよう。

？　ＫＯＫって泣ける言葉。

「ん～あれ？なんだっけ？」
僕は頭の中をフル回転させて妄想の続きを考えた。
妄想の途中で変なこと考えると道がそれて話しが続かなくなるんだよなぁ・・・
さっきなんて女の子とファミレス行くって所を妄想したら
この前ファミレスで友達と馬鹿話してたことを思い出して
女の子と何を話してるのかも忘れちゃったし。
最初から考え直すか・・・・Ｌｅｔ，ｓ妄想ｔｉｍｅ！！

「好きです！付き合ってください！」
僕は顔を真っ赤にさせて女の子・・・う～んまぁ音夢
ねむ
って事にしておくか
音夢に向かって告白をした。
「嫌です！あなたキモイしオタクだし顔タイプじゃないし。」
うん３つ言われた・・・えっ言いすぎじゃねっ！？
この台詞僕が恐れるＫＯＫだ！？うぅー恐ろしい。
あっ！？Ｋがきもい０がオタクんでＫが顔ダメだし。
えっ別にＷＫＯでも良いじゃないかって？
それだとなんか社会に出てくる団体みたいで。
そんな場合じゃない！
「・・・あっ・・・えーっと。それだけ？」
「えっまだ言って良いの？ＯＫ任せて！？」
「イやッいいっす！任せてないし！僕のＨＰをもぅ０に近いから。。」
「あっそ、じゃ、これで。」
そして音夢は走り去っていった。

ある一言？を置いて
「うぇっー」
そして僕の恋は散った。

・・・・・・あー泣ける
妄想なのに涙がこみ上げてくるよ。
ありゃ・・泣いてる僕！？
妄想で泣いてるよ！？現実で振られたら僕死んじゃうんじゃないの！？
そう思うくらい泣いていた。
（明日も学校だし寝るかな。）
そして僕は夢に落ちていった。

？　正妄って起きたら嬉しいよね！

次の日僕はいつものように・・・・・・・・・遅刻していた。
「ん～中村・・・お前今月で４回目だぞ、ついでに今日は６月５日だ！
そしてついでに１日は休みだったな。」
「へーいすみません。」
「まぁ中村なんてどうでもいい。そしてみんなに良い知らせがある！」
「えっ？！先生それはひどいよ！僕も生徒なんだから少しぐらい叱るという
事をしてくれても良いと思いますよ！」
「弓弦はドＭなの？・・・・・」
おっつ・・・やっちまった・・・・ついかまって欲しくて。。。
「おぃおぃ、僕のどのあたりがドＭだとペッタンコの美紀・・・グベェッ」
痛い！こめかみが頭が細長くなったんじゃない！？
星川（ほしかわ）　美紀（みき）の得意なゴリゴリげんこつだ。
「美紀・・・どうもすみませんでした。」
僕は今月で一番の土下座をした。
まぁまた記録を塗り替えられるかもしれないけど。
「んっ謝ったからよろしい。なんて言うと思った？」
笑顔が恐いと思った瞬間。
「グハッ」
溝うちを思いっきり蹴られた。
「ふぅーこれですっきりした。今までのストレス発散できたわ。」
「僕はサンドバックか！？てか先生なんでこの暴力現場をスルーするの！？」
「んでみんなに紹介しよう！転校生の神栄（かみざかえ）　音夢（ねむ）さんだ！」

「先生まだスルーするの！先生実は僕のこと生徒だと・・・・・ぇっ」
言葉を失った。転校してきたのは女の子でしかも
昨日妄想してた女の子そっくりだ。
そして彼女の顔を見て僕は涙を流した。
あれ？おかしいなまだ振られてないのに涙があふれてくる。
「おっおい！中村スルーしすぎただから泣くな。」
「いやっ先生気にしないで話しかけられると心がズキズキするから。」
そして神栄さんに顔を向ける。
「うぇー」
えっデジャブ！？おぃおぃ・・・正夢かよ・・・いやっ正妄？
しかし今の僕の心にはその言葉？は核兵器並みの凶器だよ神栄さん。
「ちょっと、屋上に行ってきます。。。」
「弓弦！？ちょっとどうしたの？」
「き・・気にしないでくれ・・ちょっと終わりにしたいんだ。」
「弓弦・・・行ってきなさい！」
「うわーん！酷すぎる！うわーん」
ガタガタ（立ち上がる）・・・トタトタトタ（走る）・・・ズテッ
（こける）・・・ヒクッ（泣く）・・・ガラガラ（引き戸を開けて）
・・・　ウワーン
僕は逃げたのだった。

?非行って良いと思うよっ

ここは僕がかよう高校、私立才源(ざいげん)高校の屋上だ。
なんで僕がこんな所にいるかって?
それは・・・・
「心が折れちまったよ!!バカヤロー!!」
は〜叫んだな僕。
昨日の本当に振られたらどうなるんだろうの結果はあれだな・・・・
叫ぶなんだな僕。単純だ・・・・かなしっ。
それにしても不思議な出来事って本当にあるんだね。
僕が妄想した事に近いことが起きるなんて・・・・
世界は不思議でいっぱいだね。
そう僕は空を見ながら黄昏れていた。
まぁ空は青空じゃなく曇り空でちょっと不愉快な気分になるけどね
(笑)
キィーー
鈍いこの音!?この音は屋上の扉が開く音!!
(たぶんあれでいいよな?女子が来るパターンだよな!)
僕の心の悪魔が言う。
(女の子が迎えに来るパターンでしょこれ!?)
そして天使も言う。
ちょっと悪魔と天使が同じ意見って何!?
って突っ込みたいが今はそれどころじゃない!
僕の・・・・僕の妄想が止まらなーーーい!!
後ろの足音が近づいてくる。
そして僕は笑顔で振り向きこう言ったんだ。
「僕の事を迎えに来てくれたの?ありがとね。もう心配はいらないよ、マイ、プリンセス!」
これが僕の本気の告白だ!

「今、俺は中村を山に埋めてその上から嘔吐をしてやりたい気分だ。
それに俺はお前の担任だ
ホームルーム中に飛び出したお前を殺してでも連れ戻すのが俺の役目だ（笑）」
僕の本気が3秒で崩れ去った。
少女？・・・・プリンセス？・・・・・男の娘？・・・・・このごっつい男は・・・・
「うげっ先生！？僕の愛情のこもった台詞を返してよ！男になんかに言う台詞じゃないのに！
しかも嘔吐とか殺してとか生徒に向かって言う言葉じゃない！」
「ほぉ。そうかそうか迎えに来てやったのに中村はそう言うのか。」
「言いますよ！相手が男でしかも先生だなんて！僕が嘔吐したいですよ！」
「ついでに聞こう。もしお前が最初から俺だと気づいていたら何て言ってたんだい？」
僕は十秒考えてこう言った。
「尾O　豊さんの「卒業」と「15の夜」を熱唱します！」
「中村が反抗的なのは分かった。よしお前には特別に・・・」
「特別に？・・・」
そして先生はこう言ってくれた。
「提出する課題を倍にしてやる（笑）」
僕の心が再び折れた。
「そんな最悪だぁぁぁぁぁぁぁ！！」
僕の声は学校中に響き渡った。

「もぉー今回、私を呼んだのはあの男なの？私の好みじゃないわ。
まぁ役目だから
付き合うしかないのかな？」
そういって屋上でやり取りを見ていた転校生は校舎の影へと消えていった。

?サンドバックなんて興味ありません！

「ふぅー課題を多くされるのは回避できたけど、なんで僕がこんなに雑用をしなきゃいけないんだ！」
そう僕は今あの忌々しい担任からの雑用命令をこなしていた。
雑用の内容は学校にあるポスターすべての張替えだ。
高校のポスターってどんだけ多いと思ってるだあの先生・・・
もぉ２００枚は張ったのにあと余裕で２００枚以上はある。
はぁ・・・美紀にも手伝ってくれるように頼んだのに・・・

学校が終わる直前の頃・・・
「今日、僕の雑用をこの後鉄だってほしいんだけど」
「えっ？なんであたしがサンドバックの手伝いをしなきゃいけないの？」
「ちょっ美紀！名前をサンドバックに変えないで！？みんな変な目で見てるよ！主に美紀のこと！」
「あーそれは私のこの美貌に見とれてんのよ。」
「どこに美貌があるか！？このぺったんこが！！・・・どぼぁっ！！」
強烈な腹フックが決まった。
「貧乳は！・・・貧乳は！！・・・普通なのよ！ステータスなの！胸が大きいからなんなの！？
ていうか胸が大きいのってデブってことじゃないの・・・ねぇ？弓弦！！」
「それ、グラビアアイドルに失礼なんじゃ！。。。がはっ！」
次はきれいなアッパーが僕のあごに直撃していた。
「ねぇ、弓弦・・・ぺったんこでも良いわよね？」
美紀の笑顔が怖かった、非常に怖かった。

「そうだよ、貧乳だからって気にするな美紀！貧乳でもきっと良いことが・・・・
良いことが・・・・あっ・・・・貧乳好きの男が好きになってくれ・・・
げぼらぁぁぁ！」
強烈な左ストレートが右のほっぺたにやってきた。
「弓弦なんてゴミ捨て場にいる害虫みたいになっちゃえ！！」
と暴言をおいて教室から出て行ってしまった。

「はぁ～僕が悪かったかな・・・・」
と考えながらポスターを貼り続けていると
「ちょっとそこのキモイあなた。」
・・・・・なんか神栄さんに呼ばれた。
ってキモイ男だから僕じゃないか（笑）
男子生徒なんてほかにもいるし・・
「ちょっと聞いていますかキモイ顔のあなた！」
大きな声で僕の顔を指差されながら言われてしまった。
・・・・・
「ん～何かな？ちょっと僕屋上からスカイダイビングをしたい気分なんだけど。一緒にどう？」
「あなたは頭が狂ってるんですか？スカイダイビングをいきなりしたいとか
言い出すなんて顔だけじゃなくて中身もキモイんですね。」
「いやっ！スカイダイビングしたくなったのは主に神栄さんのせいだから！」
「責任転嫁とかキモイですね！」
・・・・もぉいい・・どうせ僕はキモイから・・・話を進めよう・・
はぁ・・もぉいやだこの世界・・・
「んで何かなちょっと雑用を早く終わらせたいんだけど。」
「ちょっと、こっちに来てください。」

そぅ言われると僕は手と引っ張られた。
「えっ？あの・・・知り合いだっけ？」
「いいからきなさい。」
命令形だった。
「はい」
そして僕は校舎裏に連れて行かれた。
僕は何かの小説でこんな話を呼んだ事がある。
いつもキモイとか言われてるのにいきなり女子に「校舎裏に来て」と呼ばれる。
そしてワクワクしながら校舎に行くと・・・・・
初めてかつあげされるという話だ。
かつあげされるのかな・・・神栄さん転校してきたのが今日なのになんかすごいな
そう思っていると彼女は口を開きこう言った。
「キモイあなた、昨日妄想してた通りに私に告白しなさい。」

「えっ！？何で？てかなんで妄想の事知ってるの！？エスパーですか！？
てか僕にもプライドがあるし、神栄さんの行為はプライバシーの侵害だ！」
「いいから、言わないと殺しますよ。」
なんか、彼女のお話は飛んでいた・・・
殺す？殴るじゃなく殺す？・・・アハハハまったくかわいい冗談だなぁ
「かわいいジョークだね。殺すだなん・・」
ボコォ！！
・・・・・彼女の右拳の下あたりの土に大きい穴が開いていた。
「ごめん、神栄さんもう一回やってっくれるかな？何が起きたかわからないんだ。」

そう僕が言うと
「しょうがないですね、後一回だけですよ？」
そういうと彼女はかわいい顔で答えると左拳を軽く持ち上げ地面に突き出した。
ボゴォ！！
・・・・・・大きな大きな穴が開いていた。
「よし僕の妄想通りに告白をしようじゃないか。」
冷や汗がやばい！殴られる＝死ぬレベルの突きだぞあのパンチは？
空気圧で穴があくって何？
「お話がわかってくれて良かったです。」
何この子！？怖い！怖い！怖い！
人じゃないでしょこれ！もぉプライドとかプライバシー言ってられないよ！
「好きです！付き合ってください！」
「嫌です！あなたキモイしオタクだし顔タイプじゃないし。」
「・・・・・・・あ・・えーとそれだけですか？」
涙をこらえろ僕！
「えっ！まだ言って良いんですか？ＯＫ任せてください！」
「嫌いいっす！任せてないし！僕のＨＰはもぅ０に近いから。。。」
「あっそうですか、じゃあこれで。」
そして彼女は僕に背を向け走って行くそしてこっちを振り向き
「うぇー」
・・・・・・・僕は倒れた
涙の出すぎで干からびそうだ。
今日の朝の想像以上だ、叫ぶことすらできない
願っていない告白で振られるなんて僕はなんて不幸なんだ。
「はぁ・・・」
ため息をついて僕は立ち上がる
そうすると走って行ったはずの神栄さんが
ものすごい勢いで僕の方向に向かって走ってきた。

ものすごい顔で・・・・うんとても怖い。あの顔は般若？
それにしてもなんでこっちに走ってくるんだ？
「・・・・・！」
なんか叫んでるみたいだけど・・聞こえないな・・
「な・・・・の！　」
へ？なんだか分からない・・・そして神栄が僕の前に来てこう言った。
「なんで！あなたの妄想を叶えたのに！私はここから消えないの！」
はっ？僕は相手が何を言ってるのかさっぱり分からない。
「えっ消えるって何？神栄さん何言ってるの？」
「私は人間じゃないんです！あなたの妄想を叶えたら消える存在なんです！あっ！」
なんか神栄さんが「言ってしまった！」見たいな顔をしている。
「人間じゃないって？」
そう訪ねると彼女は重そうな口を開いた。
「そう、わたしは人じゃありません。私は人の夢を覗きその夢を叶え人の幸せから力をもらう夢魔です。」
夢魔って何？
「こっちの世界で言うと・・・サキュバスですかね？」
「サキュバス！？」
サキュバスは知ってる！あのエロイ格好をした可愛い西洋の妖怪でしょ！
でも神栄さんの顔は般若に近い状態になってたし。
「ちょっと、失礼なこと考えてませんか？殺しますよ。」
なぜばれた！てか素直に答えたら殺されそうだしここは
「考えてないよそんなこと！いやっ上栄さんは般若みたいにきれいだなって。」
「ついでに夢魔は人の頭を覗くことができます。」
「そ・・そうか（笑）んでさーそんな笑顔で襟締め上げないで！苦しいグベェ！」

「あぁすみません力を入れすぎましたっ！」
「ちょっ！！締め付けがぁぁ。　強いいいいい！！・・・きゅうう」
「あれ？落ちちゃったんですか？しかし私は何で消えないんでしょうかね
夢は叶えたのに？ちょっと頭覗いてみますか。」

?こんな夢酷すぎます！

「好きだよ、ずっと私と一緒にいて？」
そう僕は由佳から告白をうけた。しかし僕のお顔は気持ち悪い。
「僕なんかで良いの？顔気持ち悪いよ？」
「弓弦君が良いの！弓弦君の性格が好きになったんだから。」
由佳は顔を赤くして、うつむいてしまった。
それから僕たちはつきあい始めた。
最初の３ヶ月はうまくいってたと思う。
手もつないだ。キスもした。その・・・まだその先はしてないけど・・
でも５ヶ月目僕と由佳は喧嘩をした。
別れてしまうような大きな喧嘩をしてしまった。
理由は些細なことだった。
僕がほかの女の子と楽しそうに話すところが由佳にとっては
不満だったみたいだ。それから口論が続き全く話すことも目を合わすこも
無くなった。このまま僕は振られるのかなと思った。
でも僕は由佳が好きだ。喧嘩したのも由佳が僕のことを好きだったからで、
８割は僕が悪かったのだから。また仲良くしたかった。ただそれだけを願って。
ちょうど一週間後は由佳の誕生日だった。
「そうだ、誕生日プレゼントと一緒に謝ろう。」
そんな簡単なことで許してくれることはないのだろう。
でも謝りたかった。そしてできたら仲直りしたかった。
「おしっ！そうと決まったらプレゼントを買いに行くかな。」
買う品物は決まっていた。彼女がほしがっていた５０００円程のペンダントだ。

そして僕は財布に現金を入れて家から飛び出した。
前に由佳といったお店に行きそのペンダントを手に取りレジに向かった。
「これ、プレゼント用に包んでお願いします。」
僕がそう頼むと店員さんは慣れた手つきでペンダントを包装した。
僕はワクワクしながら家への帰り道を辿っていった。
しかし僕は見てしまった。
由佳と知らない男子がラブホテルから出てくるところを・・・・
そして僕は由佳と目があった。
由佳は目を一瞬目を見開くと僕のことを知らん顔をして通り過ぎようとした。
そして僕の横を通り過ぎようとした瞬間由佳は僕の持っている袋に目を移した。
由佳はこの袋がどこのお店のだか知っているだろう。
びっくりした顔を一瞬見せる。何回も一緒に買い物をしたのだから。
そして由佳は止まることなく男と話しながら僕の横を通り過ぎていった。
目から涙があふれてくる。
溢れると言うことしか知らないのか？と言うくらい涙が出る。
何分くらい歩きながら泣いただろう。
気がつくと僕は由佳の家の前にいた。まぁ帰り道に由佳の家があるだけど。
僕は由佳の家のポストに今日買ったプレゼントを入れた。
買ってしまったんだからしょうがない。僕が持っててても必要ないものだし。
でも僕の性格はねちっこい。だから僕はポストカードに今日の気持ちを書いて
一緒にポストに入れた。内容は
「今までありがとう。このプレゼントは来週の由佳の誕生日に買ったものなんだ。

ほんとはプレゼントと一緒に謝って仲直りしたかったんだけど。
由佳には新しい彼氏が出来てたんだね。おめでとう頑張って。
このプレゼントいらなかったら捨てても良いから。最後にもう一回
初めての彼女になってくれてありがとう。付き合ってくれてありが
とう。そして
さようなら。」と書いておいた。本当の気持ちと嫌みが混ざってる
けどね。
そして僕は家に帰った。僕は一人になったのだ。
まぁ高校生の恋なんて短いと思ってたけど。
思ったより恋が終わるのはつらい、なんでだろう？
やっぱり由佳をまだ好きだからかな？
また涙が溢れてきた。

その日の夜、由佳から電話があった。
出るのが怖かった。
そして手が震えながらも携帯を手にして電話に出た。
「もしもし？」
「・・・・・」
相手が無言だ。
「もしもーし？」
「・・・・ッグ」
鼻をすする音が聞こえる人はいるようだ、でも返事がない？
「由佳？どうしたの？」
「ご・・ごめっ・ん・・なさっ・・い。」
「なんで謝ってるの？由佳は悪い事してないよ。」
僕は優しく答えた。だってそうじゃないか僕が彼女に嫌われても
良いことをしていたのだから。
「悪いのは僕の方だよ。由佳は正しいよ。
今日一緒にいた男の人の方が優しそうで顔もかっこいいじゃん。
僕より由佳とお似合いだったよ。」

「弓弦はっ・・・それでいいの？・・・悔しくないの？
私の事嫌いになっちゃたの？」
由佳は勝手な事を言っていたと思う。
喧嘩したのは僕が悪い。浮気されたのも僕が悪いと思う。
でも僕を嫌いになって浮気をしたのはあっちだ。
それで「私のこと嫌い？」と聞いてくるのは卑怯だと思う。
僕は悔しいし由佳のことが今も好きだ。
でもそれを言ってどうなる？
由佳には今、僕以外の彼氏がいるのにどうやったら変わるの？
でもそう思いながらも変わると信じて僕は本音を言った。
「由佳のことを好きに決まってるじゃん。今日は仲直りしようって決心して由佳のことが好きだからプレゼントも買いに行ったんだよ？こんな事で仲直りできないかもしれないけど話すことは出来るかな？って楽しみにしてたんだ！
そんな帰り道に僕は好きな相手が知らない男の人と一緒にラブホテルから
出てくるのを見たんだから悔しいに決まってだろ！」
　いつの間にか僕は怒っていた。
僕は怒れる立場じゃないのに。
由佳は泣いていた。
泣いていれば良いと思っているのだろうか。僕が好きと言えばまた付き合えるのか。
分からない。分からない。分からない！　そうだ・・・一緒に死ねば良いんだ。
そして僕はナイフを持ち彼女の家へ・・・・

?男の夢は崩れるものさ

「見ちゃいけないものを見てしまいました。ゆがんでいますね。最後若干ホラーはいっているし。
このキモイ顔の男は独占欲が強いみたい。夢を見て途中同情しそうになりそうになりましたが
最後のナイフはいけないと思います。あの夢の続きが起こらないようにするために起こしますか。
起きてくださーい（べしべし↑ほっぺを殴る）おきてー（ぼすぼす↑腹フック）起きなさい！
（バッチーん↑ほっぺを殴る）」
「痛いよ！そんな起こし方する！？顔が2倍にふくれてるんだけど！しかも途中の腹パン何？！」
「あっ起きてくれました☆ちょっと力入れすぎましたてへっ☆」
「おぃおぃ！あんな攻撃力持っておいて良くそんな可愛いことが言えるね！」
「えーあの起こし方は普通ですよ？」
「君らの夢魔の起こし方なんて知らないよ！人はもっと優しく起こす！」
「そうなんですか？では人はどのように起こすものなのでしょうか？」
・・・・どう起こしてもらえるのだろう。僕の家は朝ベットから引きずり下ろされるし、
学校での居眠りは美佳が教科書で殴って起こしてくれる。・・・あれ？あんま夢魔のやり方と
変わらない？・・・どういう事だ・・・畜生！優しい起こし方がわかりましぇぇぇん！
なぜ僕は優しくされたことがないの！？
・・・こうなったら妄想だ！・・・・自分がどうやって起こされた

いか。
・・・・・・・・・・・・これだ！
「人だったらまず寝てる人の頭を自分の膝に乗っけるんだ。」
これぞ膝枕だ！一度は夢見るぞ！
「ふむふむ」
「そして、ほっぺをさすりながら、起きてください。起きないとちゅうしちゃいますよ？と言う。」
「ほぉほぉ」
「そしてちゅうしても起きなかったらしかたないですね後１０分ですよ？と言うんだ！」
言ったぞ！俺の妄想最高！・・・でも僕の言った起こし方だと永遠ループになるんじゃないか？
まぁいいや。
「そうですか。人の起こし方・・・・実践してみますね！えいっ！」
僕の体は宙を舞っていた。ってえぇぇぇぇぇ！
「ちょっ！なんで神栄さんは僕を投げ飛ばすの！」
そして・・背中から地上に落下。
「グハァッ！」
肺の空気がすべて持って行かれる・
「相手の頭を自分の膝にと、ほっ！」
髪を捕まれた。
「痛い！痛い！そして太ももはすごく柔らかそうなのに！なぜ本当に膝におくの！？
ゴリゴリして痛いし！」
「もぉーキモイくせにうるさいですよ？・・・・えっと・・ほっぺをさすりながら・・・」
神栄さんは確かにほっぺをさすってくれてる。
うん。さすってくれてるんだけど・・・
スースー・・スッスッスッス・・シュッシュッシュッシュッシュ！！シュウウウウ！

「熱っ！摩擦熱が熱い！なんでそんなに早く手を動かすの！？」
「えっよく人間が言うじゃないですか。ほっぺが溶けそうだって。」
「ねぇ！なんか間違ってる！その言葉を言うのはおいしいものを食べた時って熱っ！
早く手をどけて！」
「そうですね・・・無意味ですしこれ・・えーっと次は・・」
キタ！ちゅうだ！キスだ！接吻だ！こいこい！
「ちゅうって・・・なんですか？・・・えーっと」
妄想は妄想に過ぎなかった。
相手はちゅうを知らなかった。
今からキスだよって言うのも恥ずかしい。さてどうしたものか・・
神栄さん
余計なことしなきゃ良いけど。へたしたら命に関わる。
　そして考える間に神栄さんは
「ちゅ～ちゅ～」
ネズミの物まねをしたのだ。
可愛い！なぜあんなに性格は冷たいのにここまで可愛いの上栄さん！
違う意味で死にそうだよ！
しかしネズミの物まねをやっても僕は起きないそして彼女は最後の一言を言った。
「仕方ないですねあと１０分で永眠させますよ？」
「はい！起きました！今、目覚め最高です！」
ありえない！えっなんで！違う意味の寝るじゃんそれ・・・マジで恐いこの娘！
「なんで起きるんですか！キモイですね。永眠させることが出来ないじゃないですか！」
「いやっさせなくて良いから！まだＨもしたことないのに死ぬのは嫌だ！」
「キモッ」
　あっこれマジで言われた・・・傷つくわ・・・うわー・・・

「あっそうでした。私帰れないんですけどあなたの部屋に住み込んで良いですか？
それにあなたの妄想をかなえないといけないし」
・・・・まじで！
すんげー嬉しい！嬉しいんだけど・・・なんでだろう・・・・一緒に住んでたら
殺されるような気がする。・・・これは良い機会だけど丁寧に断っておこう。
「ごめんなさい。僕の部屋はある本で汚いので無理です。特に女子は」
「すべてその本を捨てましょうw」
笑顔で返された・・・どうしよ！
一緒に住んでたら絶対殺される！あーそうだ！親だ！
「家の親は厳しくてさそう言うの無理なんだよねw」
「そうですか・・・分かりました。」
あっさり解決した。最初からこの手を使えば良かった。
そして彼女は校舎の中に入っていった。
僕は今からポスターを校舎に張りに行かなきゃ・・・・
無駄な時間を過ごしたなぁと思いながら僕も校舎に入った。
ポスターが張り終わり家に帰宅する。
「ただいま～」
「あらっ弓弦お帰り。あっそうだわ弓弦に言い忘れたことがあるの
今日ね親戚の
子が来るのよしかもこれから3年間一緒に住むのよ！」
「えっそうなの！女子？」
「うん！」
母は笑顔でうなずいた。
僕はうきうきした・・親戚とあんな関係になったりして！とか
無駄な妄想を繰り広げてた・・・・グヘッ
ピンポーン

呼び鈴が鳴る！鳴った！来るぞ！僕は玄関まで走っていくそして
「いらっしゃい！・・・・・・・・・えっ？」
目の前に立っていたのは・・・
「あっやっと来たのね・弓弦この子が今日から一緒に3年間住む、
上栄　音夢ちゃんよ。」
・・・・・・えっ？
「こんにちわ、弓弦さん！よろしくお願いしますね！　　ボソッ　キモイ顔ですね何回見ても。」
なんか罵倒された・・なんでだ・・・夢魔って何でも出来るの？
これから俺の人生どうなるんだ！！
うわぁ妄想パニックだよ！
だから僕はそんな事を考えながらこう言ったんだ。
「よろしくね、上栄さん　　ボソッ　般若顔の女・・・・グヘッ」
目に見えないパンチを食らった・・・さすが夢魔・・ひとじゃない・・・な

そして僕の妄想と生活はこの日から大きく変わっていくのだった。

?男の夢は崩れるものさ（後書き）

第1部は終了！　次回からは学園内がどたばたに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6313y/

僕の妄想と夢魔

2011年12月5日21時48分発行